

Experience ロサンゼルスVA留学記

海外留学制度を活用して 最新医療の現場を体験

自主性を重んじる米国流の指導方法を
人材育成に活かしたい

四国がんセンター 消化器外科 香川哲也

平成30年度専修医等海外留学として、ロサンゼルスVAの米軍退役軍人病院の一般外科で6週間研修しました。動機としては、①米国の手術・周術期管理を体験し、手技やコンセプトの違いを学び、スキルアップに活かすこと、②米国の医学教育を学び、自己の研修姿勢と今後の後進指導に役立てること、がありました。

外科グループの構成は、指導医、レジデント、インターン、Physician Assistant (PA)、医学生です。毎日真っ暗で寒い早朝に集合、6時から指導医を除く全員で病棟を回診します。回診が早いのは手術が8時に始まるからで、回診時に採血結果が揃っている（夜間に採血）のは驚きました。それを元にチーフレジデントが中心になってミニカンファレンスをしてから、診察を行うという流れです。最終的に指導医への報告と必要に応じた指示を受けるものの、基本的には指導医なしで治療方針の決定を行えるだけの自立性、責任感といった空気が漂っていて、非常に刺激的でした。レジデントだけでなく、医学生もしっかりと自分の意見を述べており、自らの学生生活を顧みて反省しました。

手術の器具や手技は日米で大きな違いはありませんでしたが、がんの郭清はコンセプトの違いを感じました。時折、かなり大胆なシーンを垣間見るものの、基本的な手技は非常に丁寧で、特に要所ではとても繊細な手術をしており、技術の高さがよく分かりました。

術中の指導は、レジデントの手技を否定するような発言や怒鳴りつけることなどは皆無で、重要なことは時間をかけて論理的に、繰り返し指

導していました。また、すぐ指導医に判断を仰ぐレジデントには「間違っていたら訂正するから、自らの判断でしっかりと手術を進めなさい。レジデントが終わったら君が責任者だよ」と自立を促す姿勢がとても印象に残りました。局所麻酔から開腹、腹腔鏡、ロボット手術まで幅広く見学でき、また、麻酔科の先生や手術室のスタッフともいろいろ意見交換ができ、一番の目的である手術室での時間は大変充実しました。

週1回の外来では、医学生が問診を行い、レジデントが指導、最後に指導医へ報告に行き、治療方針を決めていました。指導医はレジデントに対して高いレベルでの学生指導を求め、学生もしっかり勉強して意見を出しているのは、とても有効な研修体制だと感じました。外来でも手術室でも、私にも意見を求めてくれて、難しいなりに英語でディスカッションできたのは、今後の学会などでも大変役立つ経験だと思います。他には、手術症例検討や、UCLAでの合併症検討会、講義などでも刺激を受けました。

この留学を通してもっとも勉強になったのが指導体制です。自分自身、指導を受ける立場から指導する側への移行期であり、不安や疑問がある中でしたので、指導医やレジデントの姿勢がとても参考になりました。レジデントの意見・人格を尊重しつつ、要所ではしっかりと指導し、優良な人材育成に貢献したいと思います。そのためにも、自分自身の技量向上や、知識を得る継続的な努力が必要と考えます。

手術手技については、日米の違いを知ったことで、日本で提供している手術や医療が素晴らしい

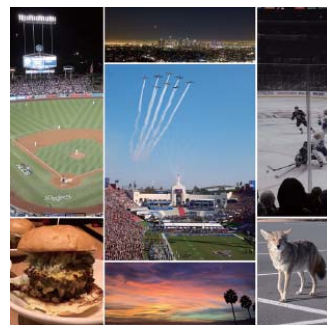
しいことを改めて知りました。現在、受けている指導を大切に、その技術をさらに後進へ伝えていくことが大切だと思っています。

医療安全の面では、慎重な患者確認、メディカルスタッフとのしっかりした治療方針の情報共有のあり方が勉強になりました。特に患者入室前のタイムアウトは、手術手順や必要な物品など内容が多岐に渡り、時間をかけていたのが印象的でした。手術件数が多く多忙だからこそ、大切なことだろうと思い、安全な医療が提供できるように適応可能な範囲でしっかりと病院にもフィードバックしたいと思います。

英語に関しては読み書きの技能が最低限あったとしても、日本で生活している限り、聞いて話す技量には限界があります。私は留学前に、ネイティブの教師を探して短期間、プライベートレッスンを行ったことが大変効果的でした。特に、重要な発音やイントネーションの誤り、現代の日常会話で使われる要素を学んだことは、チーム内での意見交換や生活圏での会話に非常に役に立ちました。行ってしまえばなんとか生活はできますし、少しずつ英語も上達しますが、意思疎通ができなければ、受け入れ側との交流も難しくなります。短い留学期間なのでしっかりと準備しておくことをお勧めします。

せっかく海外でまとまった期間生活する貴重な機会なので、観光を含めて米国の文化にも触れてもらいたいです。気をつけていただきたいのは、治安がかなり改善したとはいえ、やはり危険な国であるということです。公共交通機関で安全に動ける範囲、時間帯は限られます。私はレンタカーを借りたことで空いた時間にいろいろ動いて重宝しましたが、道を1つ間違えただけで危険エリアに入ります。慣れない右側通行、交通法規に加え、ロサンゼルスは米国でも名だたる交通事情の悪いところ。事故や渋滞はくれぐれも気をつけてください。

また、体調を崩さずに過ごせたものの、ちょ



としたケガで病院を受診しました。まさかこの研修プログラムに患者体験オプションがあるとは思いませんでしたが、とても困りました。海外医療保険の加入や、その補償範囲についてしっかりと確認しておくことと思います。

この留学プログラムは、機構本部と、現地のKaunitz先生、秋葉先生らのご尽力で、非常に恵まれた環境で質の高い研修ができる魅力的な制度です。書類の準備など大変ですが、是非多くの方に挑戦していただきたいです。多くの方のサポートがあって、無事に実りある研修が終えられたことに深く感謝申し上げます。

個人の資質に依存せず
診療の質を維持するシステムに感銘

名古屋医療センター 腫瘍内科 杉山圭司

国立病院機構が提供している派遣制度を利用して米国カリフォルニア州にあるWest Los Angeles Veterans Affairs Medical Center (VAMC)、Hematology/Oncology (血液・腫瘍内科)に5週間滞在してきました。病床数は250と本邦の総合病院としては中規模ですが、がん診療に関しては、造血幹細胞移植や治療などを除く全領域をカバーしています。

腫瘍内科に関心のある若手医師に期待して下さる患者さんや各診療科の医師がいる一方、本邦は腫瘍内科(医)の歴史が浅く、当院当科も手探りの中、診療・教育体制の充実を図っている最中です。そこで、腫瘍内科が生まれた米国の、それも市中病院の様子を見たと思ったのが応募した理由でした。

チームは5名のAttending doctor(指導医)、1-2名のフェロー(内科研修後、一般内科に進まず、さらに専門分野を研修している)、内科レジデントで構成されています。内科入院のほとんどをGIMチーム(総合内科・ホスピタリスト)が管理しており、いわゆる専門科との協力体制のもと、業務を支え合うシステムができていました。

毎朝集合して症例ごとにフェローやレジデントが状況や問題点を報告するところから始まり、指導医はエビデンスのレビューや治療方針の確

認を実施してから回診に出かけるのが基本システムです。その他、カンサーボード、肺腫瘍カンファレンス、血液腫瘍カンファレンスなど、診療科をまたいだカンファレンスがいくつかありました。

チーム変更のため、若手も指導医もよく変わりますので、申し送りが重要となり、診療録の作成にかなりの時間・労力を費やしているようです。非効率的とも言えるかもしれませんが、担当医が変わっても一定の品質が維持されており、医療の標準化が図られている点には脱帽しました。若手医師はUpToDateとNCCNガイドラインを常に参照しながらやっていました。もちろん、標準的な対応が難しいケースでも指導医はエビデンスと経験を駆使して助言し、適切に対応していました。

外来は週2回で、患者は指導医の枠を予約して訪れます。必ずフェロー・レジデント・フィジシャンアシスタント(PA)のいずれかが評価・診察して次に指導医と改めて診察する方式を徹底していて、入院・患者とともに同じスタイルで続けていくことで、個人の資質に依存せず、一定の水準を持つ専門医が育成できるように思われました。当科でも臓器を問わず広く固形がん患者を受け入れ、診断や化学療法、緩和ケアなどに取り組んでいます。標準化された米

国の教育病院の水準と比べ決して劣っていないように感じ、少し安心しました。

VAMCのシステムをそのまま導入することは困難ですが、以下は有益であり、工夫次第で導入可能なシステム・マイルストーンと考えました。

①複数の指導医、フェロー、レジデントでチームを構成し、ケアに当たることによって診療の質を確保・向上すること(誰かが欠けてもフォローやすく、人が変わっても質が低下しない、休みも取りやすい)、②担当医が変わっても経過・方針が分かる一定の方式による診療録の作成・ガイドラインの参照、③個人の性格や努力に依存しすぎず、ルールに乗っていれば誰でも一定の水準に達することができる教育システムの構築、④GIM・ホスピタリストの育成と構築・充実による専門医のサポート、⑤腫瘍内科による専門的・標準的ながん診療・薬物療法の提供

この記事をお読みになっている方の中には、腫瘍内科やがんの薬物療法に関心のある方がいるかもしれません。本邦においても腫瘍内科や臓器横断的ながん薬物療法の確立は十分可能だと確信しました。

当院腫瘍内科が国立病院機構を代表する腫瘍内科となれるよう、今回の経験を還元して精進していきたいです。また、どの診療科を目指す方にとっても、環境が変われば新しい発見があるかもしれません。あまり変わらないと感じるかもしれませんが(それも発見だと思います)、是非この制度を利用して広大なロサンゼルスで一時的に過ごしてみてください。

最後に、研修に関してサポートいただいた国立病院機構、応募に関してご協力いただいた関係各位の皆様にも心より感謝申し上げます。



Attending doctorの誕生日をメンバーで祝っている様子



週間予定表(ラウンド、外来:院内2回+分科1回、カンファレンス、UCLA見学のチャンスもありました)



レジデントもしくはフェローがまず患者を診察し、その後別室で待機するAttending doctorに報告、対応を議論してから再度、診察に向かうシステム(こちらは待機室)